

小松文芸賞

晩年の父と暮らして

須天町 浜原 和子

大根の煮付に鰯の粕汁、いり卵と粥の椀を黒塗りのお膳に並べ、離れに寝ている父の部屋に運んだ。戸を開けてもだまつて寝ている父に、

「おじいちゃん、さあお昼になったぞ。」と呼びかけると、父は布団の上に起き上がり、

「はや昼飯か なんにも腹空かんがや、雪降つとるがんねえけ。」と聞いた。

「降つとる降つとる朝から降り止まんし寒いぞ。」と父に寄り添ってガラス戸越しに庭を見ると、燈籠の上にも樅の枝にもこ

んもりと雪は少しもやむこともなく降り続いていていた。

御膳の方に向かった父は箸に手を触れず、

「丁稚奉公しとる時こんな雪の中を草鞋をはいて、蓑を着て笠をかぶり、日頃は鉄輪の車も雪で動かず天秤棒にお菓子の入った折を下げて、村から村へ田舎の店に菓子をお卸しに行ったがや。雪道の足跡を歩いて行くと擦れ違ふ時「御免」と言つて天秤棒を縦にかわし足早に江沼郡まで商いに行つたもんや。」

帰りは雪が解けて道がじゃがじゃがになり、おろし大根を流したような道で草鞋の足はぬれびたしで冷たかったわ。夜、足袋を脱ぐと足の指が真赤になつとつたなあ。」靴下をはいてストープのそばに居てもいつも冷えると言っている私は苦しかった。父は庭を眺めながら、

「真夏のカンカン照りも暑かったが木陰へ行けば涼しい風があつてまだ凌げたけど、雪道は辛かったなあ」

私に聞かすでもなく一人言のようにも思えた。私が何遍も聞いた父の繰言だった。でも私は聞いたよとか、知ってる知ってるとは決して言わなかった。私に話すことで若き日の労苦が癒やされるなら……。

食べはじめた父だったが箸を弄ぶように食べていた。これ迄は食事を残すことのない父だったが、半分程食べて残りを箸でお皿に寄せながら

「これは夕食に食べるから夜は何もいらんぞ。」と言つて大息をして横たわった。まずいとか嫌いだとか言ったことがなかった。九十六歳まで食事は質素でも栄養に留意して、ビタミン、蛋白質、カルシウムを摂取しなければと言っていた。日毎に食欲

が細って来たのに恐る恐る付添っているの
みの私だった。一寸そばを離れたすぎに息
を引きとって永遠の眠りについた。

日清戦争、日露戦争、満州事変、第一次
世界大戦、第二次世界大戦、敗戦と戦争の
中を無事に生き抜けた父だった。幸い戦争
には行かなかったものの経済的にどん底に
落ち込み心労と老齢期に入っても再び家業
を立ち上げる為に老体に鞭打ってがんばっ
ていた父の姿が忘れられない。私も家業を
手伝わされ自転車に乗って飛び回った。

「女と井戸水使へば使ふ程美しくなる。」
父の言葉だった。恐ろしい言葉だった。悲
しい言葉だった。でも私は父を憎めない。
その厳しさがあつたればこそ今の私がある
のだ。

年々暖冬になり雪が降らなくなったが、
雪の降った日は、父の天秤棒をかつぐ姿が
臉に浮かぶのだ。

